発　行
北海道ポーランド文化協会
〒060－0018
札幌市中央区北 18 条
西 15 丁目 3－19 安藤方
電話・FAX 011－556－8834
hokkaidopolandca@gmail.com

POLE

第 93 号 2018.1.25
北海道ポーランド文化協会 会誌

北海道ポーランド文化協会
東京事務所
〒107－0052
東京都港区赤坂9－6－29－309
音響計画㈱ 霜田気付
電話 03－6804－1058
FAX 03－6804－6058

《第 82 回例会》

コルチャック先生：講演と映画の集い

講演「コルチャック先生の思想と生涯～子どもをいかに愛するか」

講師：塚本智宏（東海大学教授）

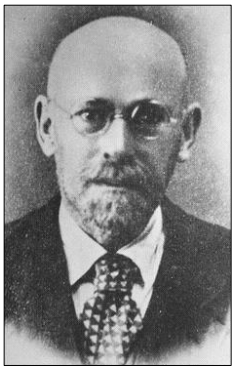
映画『コルチャック先生』1990 アンジェイ・ワイダ監督

会場：札幌エルプラザ 4F 大研修室

日時：2018 年 3 月 24 日（土）13:30～16:50

入場無料・予約不要

1918 年、今からちょうど百年前、Dr.コルチャックは『子どもをいかに愛するか』という本を出し、“子ども”は「不思議で生命に満ちあふれ、予期し得ぬ点で最高の輝きをもつ」「現代の学問が“知らない”そういう独創的なものを理解し、愛することを伝えたい」と述べました。



この本で彼は、それまでの人生で小児科医や青少年養育ボランティア活動家、孤児院の院長として「肉眼で」、つまりだれもができるやり方で観察してきた、赤ん坊から青年までの子どもたちについて深く書き記しています。

彼はこの本のずっと前から、子どもにはおとなが軽視している人間的価値があると考え、ポーランド独立を機におとなたちがそれぞれ自分の権利を叫ぶ中で、社会における子どもの権利を訴える、子どもの権利擁護官の立場をとりました。

そういう彼の思想と生涯を振り返ると、彼の晩年を描いたアンジェイ・ワイダ監督の映画『コルチャック先生』、とりわけ強制収容所に向かう“最後の行進”のシーンは、子どもの人間としての尊厳を訴えるコルチャックという人間（大人）の生き方を後世の人々の目に焼き付けるものになりました。

講演と映画上映に先だって一週間ほど、彼の思想や生涯についてのパネル展示も行います。ぜひ足をお運びください。　（塚本智宏）

先行開催　〈パネル展示〉**コルチャック先生の思想と生涯**

～子どもをいかに愛するか～

会場：札幌エルプラザ 2F 交流広場（北 8 西 3, JR 札幌駅北口徒歩 3 分）

日時：2018 年 3 月 16 日（金）～24 日（土）8:45～22:00（日・祝 20:00）

創立 30 周年祝賀会

（ニューオータニイン札幌、2017 年 10 月 21 日）

村田 譲

今年で創立 30 周年ということで日本、ポーランドともに家族連れを含めて 60 名と多数の参加があった。会長の安藤厚氏の挨拶、ポーランド大使、広報文化センター長の祝辞の代読。坂田朋優氏によるショパン「別れの曲」などピアノ演奏は実にタッチが軽やか。

東京事務所の霜田英磨所長の乾杯の後は、いままでの協会の出来事を当時の参加者の説明入りでスライド上映した。そして音楽パフォーマンスの時間。登場したのは学生のコワルスカ・リリアナ嬢によるサックス演奏で曲目は「大きな古時計」、たどたどしさはあるものの更にはピアノでも演奏する。音楽がすごく好きな感じが楽しい。続いて数井バルバラ嬢と三人の男性のコーラスになると、歌の途中でポーランドの方はほとんど舞台に昇ったのではないか、まさに大合唱となる。ついでにポーランド国歌『ドンブロフスキのマズルカ』、将軍の個人名がタイトルについて歌詞にも登場する勇ましさに驚く。

その後、阿部和厚北大名誉教授のムックリ演奏と解説が始まる。マウスハープ（口琴）とも呼ばれるが、由来は今一つはっきりしないとのこと。すでにモンゴルなどでは紀元前からあったようで、シルクロードを通してヨーロッパ各地に伝わりイギリス、ドイツ、ハンガリーなどに名前が残っている。日本では 1,000 年前の奈良時代の神社から出土しており、これは中国から伝わったと考えられる。また、江戸時代に流行しそのときはポルトガル経由であったらしい。北海道には金属製と木製とがあるが、金属製のものは、当時は製造技術がなく輸入品である。サハリン、シベリアなど中央アジアにそっくりのものがあるという。なおニューギニアのムックリは別系統のものとのことだ。世界的には金属製が主流となり、またヨーロッパはリズム重視であるとか。このムックリの演奏方法に関して、ムックリは弦が一本であることから、すべて同じ音になるので口蓋を使い、倍音を利用することで変化を作り出している。当日は「風の音」などを披露した。

最後には、新会員となった菅原みえ子氏が自作詩「さかさ」を、いささかひねくれ者でありますとの自己紹介のように朗読する。長屋のり子氏は自作の「盲いたシンキンチョウの絶唱」を時間の許す範囲で会場に響かせた。終わりは副会長の霜田千代麿氏による三本締めであった。

（むらた・じょう、「空への軌跡」吟遊記 2017/10/29 より）

写真（上）長屋のり子、村田譲（中左）阿部和厚（中右）霜田千代麿、菅原みえ子（下左:２列目中央）マルタン・グレゴリウス、安藤厚、遠藤郁子のみなさん（下右）『ドンブロフスキのマズルカ』

ポーランド広報文化センター「忘年会」

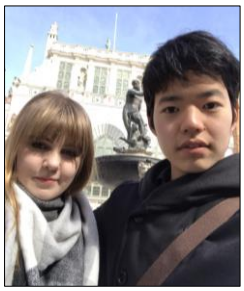
2017年12月5日（火）大使館ホールで「忘年会」が催され、来年1月に離任される**ブワシチャック所長の退任**ご挨拶がありました。

本会からは霜田が参加しご厚誼に深い感謝を申し上げ、所長から「これまでの親身な交流にとても感謝しています。帰国後もおつきあいの機会があれば幸いです」とのお話がありました。（霜田英麿）

ブワシチャック所長と栗原美穂さん(⇒)

波蘭（ポーランド）見聞録

大塚 広介



2017 年 3 月 20 日、東京・羽田空港よりモスクワ経由で私は無事、ワルシャワ・ショパン空港に到着した。空港内の税関では私を含めアジアからの旅行客が沢山訪れていた。私の拙い英語で後ろの中国人に尋ねながら税関を抜けると、そこはもう異国の地だった。私はこれまでにもタイ、グアム、オーストラリアなど海外には何度か出たが、どれも家族旅行、留学など他人の勧めた旅がほとんどで、完全に自費の個人的な旅行で、しかもヨーロッパに来るのはこれがはじめてだった。慣れぬ地で右往左往しながら待合室に行くと、恋人のエヴェリナが待っていた。今回の目的はズバリ彼女との旅行だ。かくして私の人生初のポーランド見聞録がはじまった。

ワルシャワ

ポーランドでは、まずエヴェリナとワルシャワの街を探索した。ワルシャワの街は都会的な要素も多く日本の横浜や首都圏に近いかもしれない。首都ワルシャワのほかにも、ポーランドには歴史感漂う古都がいくつもある。今回は私が訪れた三つの古都を中心に話したい。

まずワルシャワで一番印象深いのは聖十字架教会だった。大聖堂ではイエス・キリストの彫像やステンドグラスが煌びやかでお洒落な空間を醸し出し、ポーランド人の信心深さを感じさせていた。階段は辛いが、時間をかけて自分の足で昇った教会の展望台からは古都を一望でき、ヨーロッパに来たのだと存分に味わうことができた。

エヴェリナ曰く、ヨーロッパでもキリスト教を重んじる人々は年々減っているらしい。最近は特にポーランド人でもトルコやアフリカ系の男性と国際結婚を経て改宗する人もいて、教会はこの先廃れていく運命らしい。とはいえ、こういった歴史を感じさせる宗教施設は神社でも、寺院でも、教会でも、モスクでも、後世に残して子供達に正しい歴史を伝えるのに役立ってほしいものである。

宗教観を感じながら、エヴェリナにポーランドの歴史についていろいろ聞くことができて非常に面白かった。ポーランドは何度も興亡を繰り返しその度に不死鳥の如く復活している。これだけ強国に挟まれた国は世界でも珍しく、ドイツとロシアの中間にあるポーランド以外では、日本と中国に挟まれた朝鮮半島くらいだろう。

ワルシャワを探索して五日後、エヴェリナの実家のあるグダニスクに向かった。グダニスクは港町で、日本で言えば大阪や神戸に近いかもしれない。そこからさらにマルボルク城に向かった。この城はエヴェリナとガイドさんによるとヨーロッパでも最古の部類の城らしく、城内には歴史漂う刀剣や鎧が飾られていて、ポーランドにかつて存在したフサリア（騎兵）から説明を受けた。彼らは「我が国には侍にも負けない戦士がいたんだ」と誇らしげだった。

ポーランド料理

ポーランドは歴史だけでなく、料理も興味深かった。私の一番のお気に入りはピエロギである。種類によって違うが、チーズや野菜のはいったオカズ系から、クレープのようにジャムやストロベリーが入ったものまで多種多様である。エヴェリナの実家では私がパクパク食べるのを見て彼女の母が目を丸くしていたが、ポーランドの料理は非常に日本人の口に合う気がする。日本ではあまり馴染みがないが、日本でもポーランド料理店を大々的に展開すれば流行るかもしれない。

彼女の父からは中々興味深い話が聞けた（私のお粗末なポーランド語のため大分エヴェリナに通訳してもらった）。まずポーランドでは街中に多くのサムソン製のテレビがあり、彼女の家のパソコンは台湾製で、父の自慢の愛車はトヨタとスズキだった。父曰く、日本車はステータスの一部らしい。ポーランドはアジアの企業の EU 進出の架け橋なのかもしれない。

日本とポーランドの違い

さて、ポーランドを歩きポーランド人と話してみると、日本とは相違点が多かった。まずポーランド人は非常に礼儀正しい。ホテルマンからタクシーの運転手まで明らかに外国人である私にも嫌な顔もせず明るく接してくれる。そして何より、この国は非常に移民が少ない。ワルシャワやグダニスクを歩いてもほとんどが白人系のポーランド人で、アジア系に出会ったのは空港の税関前とグダニスクの寿司レストランだけだった。その後訪れたクラクフでも移民系の人は見られず、ましてや私達のような国際カップルはほとんど見られなかった。しかしこのポーランドの移民への不寛容さは、外国人旅行者にとっては嬉しいことかもしれない、まずポーランドは EU

の中でも物価が安く、多くの外国人が気軽にヨーロッパを楽しめ、かつ独自の食文化や景観を楽しめる。国際化と言うと聞こえは良いが、ポーランドや日本のようなある種閉鎖的な国柄は、外の文化圏から来る人間から見れば非常に独創的個性的であり何より面白い。国際化は大いに結構だが、まず自分の文化を守り子孫に伝えるのが一番大切であろう。

かくして私の二週間のポーランド紀行は幕を閉じた。空港でエヴェリナは別れを惜しみ涙したが、来る12月、今度は彼女のほうが日本に来る予定だ。一体彼女が本物の日本を見て何を感じるか、今から楽しみである。彼女の日本旅行はまた機会があれば皆様にお伝えしたい。

（おおつか・こうすけ、2017.9.30）

写真（上）エヴェリナと筆者（中）ポーランド料理・ピエロギ（下）クラクフ・聖マリア教会

ポーランド&ニッポン歳時記

キノコ狩り

今秋はキノコが豊作でした。キノコ狩り(grzybobranie)という伝統は『パン・タデウシュ』にも描かれています。私も子供のころに参加したことがあります。後でキノコの「帽子」と「足」に糸を通して部屋に干すと、家中が森の香りでいっぱいになったものです。

zapach dzieciństwa　ビゴス鍋
podgrzybki prosto z lasu　思い出が沸く
w garnku bigosu　キノコ狩り
Monika Tsuda, Poznań　ポズナン市、津田モニカ

kropla po kropli　雨だれの
deszcz rytmy wystukuje　リズムに踊る
do liści tańca　木の葉かな
Piotr Wrzeciono, Warszawa　ワルシャワ市、ピョトル・ヴジェチョノ

老松や冬霧（ふゆもや）けって龍昇る
若水やノミ研ぐ鬼師鬼を彫る
往きし人窓の向かふの雪明り
岩見沢市、霜田千代麿

第19代札幌コンサートホール専属オルガニスト

マルタン・グレゴリウスさんに聞く

徳田貴子

マルタン・グレゴリウスさんはポーランド・グディニア出身、2017年9月1日キタラの専属オルガニストとして札幌にやってきた。キタラでのデビューコンサートでは即興演奏を含む素晴らしい演奏を披露された。はるばるポーランドから札幌にやってきたマルタンさんの素顔に迫るべく、去る10月23日、初雪が降るなか札幌パークホテルでお話をうかがった。

行間を読む日本人のコミュニケーションは素敵

マルタンさんは日本での生活は初めてである。日本といえば歴史ある建物が多いイメージだったが、札幌は予想外に現代的で綺麗な街でびっくりしたという。特に札幌駅と大通り駅をつなぐ地下歩行空間には「寒いから皆さんこちらを歩くのですね」と感心したそうだ。食べ物は「ラーメン、寿司、てんぷら、しゃぶしゃぶなど美味しいものばかりで大好きです。でも、納豆は苦手ですね」とか。

日本人の印象は、大変礼儀正しく良い方ばかりで、日本人の精神性が好きだと何度もおっしゃっていた。特に、日本人は仕事の上でも「できない」ことを「できない」とはっきり言わないことに気づいて、ヨーロッパの人々はもっと正直に思ったことをはっきり言うけれど、「日本人の行間を読むようなコミュニケーションの仕方は素敵だ」と感じたという。筆者も米国に 10 年間留学して当初は「No」とはっきり言えず、欧米の方とスムーズにコミュニケーションをとれなかったことを思い出して、意思疎通の方法の違いを「素敵なこと」と受け入れてくださるマルタンさんにとても親しみを感じた。

日本の観客には演奏者に対する敬意を感じる

コミュニケーションの取り方は観客の反応にも現れる。筆者は留学中、アメリカ人の歌手の友人から、ドイツでシュトラウスの歌曲を歌ったら聴衆も一緒に歌いだしてびっくりしたと聞いたことがある。日本のお客さんの反応にも違いはあるのだろうか。

「デビューコンサートでは、最後に《赤とんぼ》や《ソーラン節》など日本の有名なメロディーをふんだ

んに取り入れて即興しました。絶対皆さん知っている曲ですよね。もしこれがドイツならお客さんが隣同士で『この曲知ってる！』とかヒソヒソ話を始めます。シュトラウスを歌い始めたというのも、きっとそういうお国柄のせいでしょう。でも日本人はそういうときでも皆さんとても静かですね。きっとシャイなんでしょうね。拍手のときも、誰もフライングせずみんな一斉に拍手してくれます。でもそういうところに温かみや、演奏者に対する尊敬の念を感じます」

筆者の経験でも、聴衆が一生懸命音楽を聴いてくださっていると、ステージ上の演奏者にもそれは感じとれる。そういう聞き手の集中力が半端でないことは、特に日本に帰国後、強く感じている。マルタンさんもそれを感じているのかもしれない。

即興ではより自由になれる

デビューリサイタルでは素晴らしい即興を披露されたマルタンさん。彼にとって「即興演奏は長年やってきたので、とても自然なことなのです」。「初めて即興をしたのは 5 歳のとき」とは驚きだ。「初めは既存のメロディーにカウンターメロディー（内声）を探して付け足すといったシンプルなものでした」というが、和声や構成などをよく知っていないとできないことだ。マルタンさんは「誰かが作曲したものを演奏するときは、作曲家のメッセージを解釈して聴衆に届ける責任を強く感じますが、即興ではより自由になれます」「即興するときは和声や構成などたくさんのことを考えますが、より自由に表現できます。音を間違えても、そこから発展させられますしね」という。彼にはそれだけの知識と経験があって、作曲家の世界を伝えるメッセンジャーとしてだけでなく、自分自身を表現するために、自由自在にオルガンを演奏しているのだろう。

オルガンとの運命的出会いと三カ国での音楽教育

マルタンさんとオルガンの出会いは運命的だった。

「小さいときテレビでグダンスク市のオリヴァ大聖堂(Gdańsk Oliwa Archcathedral)のとてつもなく巨大なオルガンの演奏を見たのです。録画ビデオをその後2千回も見たと思います。しばらくして両親に連れられてその教会を訪れ、オルガニストに会うことができました。その方がのちの私の先生です」

それがきっかけでピアノとオルガン両方を専攻してグダンスクの音楽学校を卒業し、さらにドイツ（デトモルト）とフランスの国立高等音楽院（パリ、リヨン）で研鑽を積んだ。両国での教育の違いは、「フランスでは先生はとても素晴らしいけれど、生徒を子ども扱いするというか、生徒は先生の言うことを聞かなければいけないという感じでした。一方ドイツでは、一人ひとりの個性をより大事にして、一人の音楽家として生徒を扱うという風でした」という。体系的な教育を授けられた一方、それを昇華させて一人前の音楽家として立つ教育も受けたのだろう。博士課程を終えるころパリ高等音楽院の教授からキタラのオルガニストへの応募を勧められたのだそうだ。

歴史などあらゆる側面から音楽を研究したい

日本にいる間、たくさんの都市でコンサートが企画されているので（12 月すみだトリフォニーホール、7 月サントリーホールほか）、まずそれを成功させたいという。先代のオルガニストから「日本には素晴らしいオルガンがあると聞いていますので、その楽器に出会えるのも本当に待ちきれないです！」と嬉しそうに話してくださった。

博士論文が終って今はより自由な時間があるので、レパートリーも増やしていきたい、特にフランス印象派の曲をもっと勉強したいという。

「単に曲を学ぶだけでなく、歴史や作曲家の人生など、あらゆる側面から曲を研究していきたい。3 月には録音する予定なので、それも頑張りたい。今回は CD のほか、初めての試みとして ITunes でも配信されるので楽しみです」とのこと。

オルガンにはいつも新たな発見がある

マルタンさんにとってオルガンは運命の楽器といえるだろう。長年ピアノも勉強されてきたが、オルガンという楽器の良さについて、こう語ってくれた。

「オルガンはとても大きく豊かな音がしますし、その特性を生かしてオーケストラのような音を出すことも可能です。また、ハーモニーによって音がとても変わります。ストップを用いて音色を変えることもできて、いつも新たな発見があります」

即興演奏を自在に操り、オルガンという楽器の可能性を探求し続けたいというマルタンさんの音楽への情熱は途切れることがない。

札幌での次の演奏会は、12 月 9 日（土）札幌コンサートホール開館 20 周年記念オルガンガラコンサートで初代・2 代目のキタラ専属オルガニストとの共演、そして雪まつりの **2018 年 2 月 4 日（日）**札幌コンサートホールで**オルガンウィンターコンサート**。

小さいころからオルガンに魅せられ、人一倍努力されてきたマルタンさん。日本特有の文化にも理解を示し、ポジティブに受け入れてくださるところに人柄の深さも感じた。歴史的背景や作曲家の人生もより深く研究し、あらゆる側面から曲をとらえたいというマルタンさんの奏でる音楽がここ札幌でどのように進化していくか、大いに注目したい。（とくだ・たかこ、2017.10.28、写真 松山敏）

創立 30 周年祝賀会 (2017.10.21) に参加したマルタンさん

「樺太酋長バフンケ」の髑髏（されこうべ）、遺族への返還なるか

井上 紘一

北大への遺骨返還請求

往時には邦領南樺太東海岸のバフンケ酋長として知られた木村愛吉氏の髑髏が、北大医学部収蔵の人骨資料中に見出されるとの情報は、『北海道大学医学部アイヌ人骨収蔵経緯に関する調査報告書』(2013.3)で初めて公開されました。但し同書はそれを人骨 943 号(相浜 1)と記すのみで、木村愛吉氏の遺骨とは明記していません。とはいえ、エンチウ(樺太アイヌ)人骨 71 体中で「個人特定可能」と特記されるのは「相浜 1」だけで、児玉作左衛門北大教授が 1936 年 8 月に東海岸の相浜で発掘した「頭骨」と記載されています。しかも北大収蔵アイヌ人骨としては、二人のアイヌ著名人(「日高酋長ペンリュウ[平村ペンリ/ペンリウク]」と「樺太酋長バフンケ」)が言及されています。そこで私は 2016 年 4 月、同大学の「アイヌ遺骨等返還室」に対し「相浜 1」と「バフンケの髑髏」の同一確認を求めましたが、私の申し入れは個人情報保護を口実に峻拒されました。

その後、横浜の木村和保氏は 2017 年 4 月、祖母チュフサンマの叔父に当たる木村愛吉氏の遺骨返還請求書を北大に提出しました。和保氏はブロニスワフ・ピウスツキの一人息子助造氏の唯一のご子息ですから、それは日本におけるピウスツキ家の問題でもあります。

アイヌ遺骨等返還室は7月6日付で木村和保氏を遺族の一人と認め、7 月 14 日から 1 年の公示期間中に他の遺族からの請求がなければ返還交渉に着手するとの段取りを通達しました。つまり、正式の返還は 2018 年 7 月 14 日以降に決定されるわけです。とはいえ、平取の平村ペンリウク氏の事例では、返還交渉が軌道に乗り出したところで平村氏の遺骨ではないとしてキャンセルされただけに、本件の成否は今なお予断を許しません。

木村愛吉(バフンケ)氏の生涯

木村愛吉氏(1856-1920)は樺太東海岸小田寒の出身。明治初年にアイ・コタン(相濱)に居を構えて以来半世紀にわたりエンチウ有力者として活躍し、1920 年に相濱で没しました。ロシア時代末期にはロシア人や日本人の漁業者に伍して 2 漁場を賃借、資本主義的経営の漁業を起業して蓄財に努め、ペチカの備わるロシア式丸太小屋まで建てています。「樺太でも有名な暖かい家」とされる同宅にはピウスツキが寄寓し(1902-1905)、姪のチュフサンマと恋仲になって結婚に至りました。当時のチュフサンマは父シレクア(愛吉氏の兄)とともに、隣接するアイヌ式住宅(チセ)で暮らしていたようです。

50 代の愛吉氏と直に接した松川木公は彼を「容貌頗る魁偉、身の丈は六尺五寸に餘」る大男、風貌は「動物園の獅子」さながら(松川『樺太探検記』1909)と、石田収蔵は「巧みに邦語を談じ、露語に通じ、外交に敏」(青山『極北の別天地』1918)と評し、青山東園はロシアの文豪トルストイやゴーリキー、千徳太郎治は西郷南洲になぞらえていました。因みに、ピウスツキの撮影した写真に収まる痩身の愛吉氏(写真 1)から 197 センチ超の巨漢を想像できる人は稀でしょう。日露戦争最末期の 1905 年 9 月 3 日、南部樺太占領軍の太秦供康支隊長はボリショエ・タコエ(大谷)で「バフンケ酋長」と別れの杯を交わした際のスケッチを「樺太出征日誌」に残しています(写真 2)。写真 1 とほぼ同年齢の愛吉氏の風貌は、やや端麗に過ぎるとはいえ、松川らの記述とも矛盾せぬように思われます。

樺太庁は 1921 年、東海岸中部の 10 コタン(北から南へ、オハコタン/箱田、マヌエ/眞縫、シララカ/白浦、オタサン/小田寒、アイ/相濱、ナイブチ/内淵、サカヤマ/榮濱、ルレ/魯禮、シヤンチャ/落合、タコエ/大谷)の住民を集住させるべく白濱村を建設しました。総移住が開始された 8 月 1 日には村長以下 9 名の村議(あるいは評議員)からなる村の統治機構が整備され、村長には魯禮部落総代だった内藤勘太郎、そして残る 9 コタンの部落総代が村議に就任します。例えば大谷熊吉(チュフサンマの娘キヨの夫)は、大谷の前部落総代として村議を務めました。こうして 10 コタンは廃村となりますが、旧村にあった墓地は恐らくその後も踏襲されたものと推定されます。

愛吉氏は 2 度の妻帯歴にもかかわらず、いずれの配偶者も子宝には恵まれず、養子の男子親族レーヘコロ(1890-1930 年代後半、日本名木村愛助)に資産を相続させました。千徳太郎治によると邦領時代の愛吉氏は、その「露西亜式の大建物」(丸太小屋)が樺太庁から驛逓に指定され「相川渡船を兼ねて營業し」「部落總代等の公務にも就かれ、公衆の爲め盡くされ」そしてこの「大建物」では旅籠屋を営んだとも伝えられますが、愛吉氏の没後に「二代目の愛助が此の家を他人に賣却して仕舞つた」(千徳『樺太アイヌ叢話』1929)そうです。木村愛吉一族は日本統治下で次第に没落してゆき断絶したらしく、愛助氏の子孫に関する情報は不詳です。愛吉氏が 1921 年の白濱集住を待つことなく、その前年に亡くなったのは却って仕合せだったかも知れません。

2018 年 1 月 10 日には拙訳編書『ブロニスワフ・ピウスツキのサハリン民族誌』が東北アジア研究センター叢書第 63 号として上梓されます。同書はピウスツキの樺太島にかかわる人類学的労作 11 篇の邦訳と、参考論文として拙稿「樺太島におけるチュフサンマとその家族」も収録しています。本稿で紹介する木村愛吉関連情報は同論文から抜粋しました。詳しくは同書をご覧ください(非売品ですが、国内外の主要な大学図書館に寄贈されます)。

上記拙稿で本件に直接かかわる「エピローグ」から、最末尾の一節を以下に転載します。

(北海道)大学の「アイヌ遺骨等返還室」は木村氏の請求を審査し、近い将来には、「バフンケ頭骨」を正統な遺族に返還するか否かを決定するであろう。その回答がいずれであれ、北海道大学は以下の設問に対し、誠実に答える責務を負っている。

(1)一九二〇年の埋葬後十六年しか経っていない木村愛吉の墓は一九三六年八月一日、相濱のエンチウ墓地で、果たしてどのように、何故、また誰によって、暴かれることになったのか。

(2)「相浜1」が木村愛吉に帰属することを立証する議論の余地のない根拠は何か。「樺太酋長バフンケ」なる名称が、他の七十体のエンチウ遺骨とは違って、例外的に記録されえたのは何故か。

(3)北海道大学は木村愛吉の頭蓋骨取得以降八十年の長きにわたって、その存在を学外、なかんずく彼の子孫へ向けて発信することを怠ってきたのは何故か。

(いのうえ・こういち、北大名誉教授、2017.10.25)

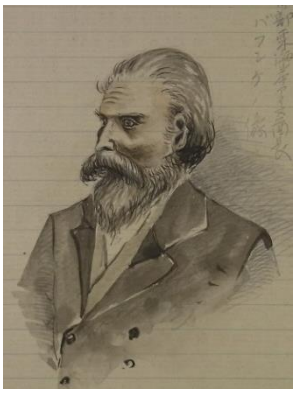


写真 1(左)ピウスツキ撮影の木村愛吉氏(1902-1905)この人物を初めてバフンケと断じたのはサハリン州郷土博物館の M・M・プロコフィエフ氏。その経緯と論証に関しては上記拙稿(注五、三〇)を参照。

写真 2(右)南部東海岸アイヌ酋長 / バフンケノ像(北海道博物館所蔵手稿、太秦供康「明治三十八年 樺太出征日誌」より)

NHK《ラジオ深夜便》より

ポーランドの住所表記

岡崎 恒夫

留学から帰ってきた教え子がしばしば日本の住所を探すのには骨が折れるといいます。今でこそ GPS を頼りに探せばさほど難しくないのでしょうが、日本の住所表示のシステムはわかりにくいようです。

日本では○○県○○市○○町○○丁目○○番地という風に表し、大きい行政区から小さい方に向かって書きます。ところがポーランドでは先ず通りの名前、その次は建物の番号があって最後にアパートの番号が来ます。その次に市の名前が来ますが、県名は書きません。そのシステムは非常にわかりやすく、初めて訪ねる場合でも、どこにその通りがあるかを知っていれば(もちろん地図にはそれが記されています)容易に建物にたどり着くことができます。日本の行政単位は県から町までは面ですが、ポーランドのそれは市以下が線(○○通り)になります。

例を挙げましょう。日本では○○町の中に○○丁目がパッチワークのように張り付いています。例えば 1 丁目の側に 2 丁目がありますが、それが上下にあるのか左右にあるのかわかりません。したがって 1 丁目の右に 2 丁目があり、左に 5 丁目があるという事態が生じます。ポーランドの場合はこの丁目に当たるのが通りで、すべて線で表されます。つまり、その町に存在するすべての通りに名前が付けられているのです。そしてその通りに沿った建物の番号は、町を流れる川に平行して走っている通りの最も小さい「1 番」がその川の上流から始まります。完全に平行でなくて少しぐらい角度がついていても同じ原則です。次に川と直角に走っている通りは、川に最も近いところから 1 番が始まり、川から遠のくにつれてその番号が増えていきます。そして、道の片側は奇数番号、反対側は偶数番号が振られています。

ここまで聞いて皆さんは、では一体通りの名前はどうなっているのかと思われることでしょう。そこで、ポーランド最大の都市ワルシャワの通り名を数えてみたら、4,000 をちょっと上回る数でした。と言うことは他の町はこれよりもっと少ないと言うことです。市の道路局が、この 4 千もの名前を付けるのは大変だろうと思われるでしょう。お察しのとおり、名前を付けるのに相当苦労した跡がうかがえます。従来の通

りのほか、新興住宅地の通りにも名前を付けなければならないので、大変な作業だろうと察します。

この住所表示システムは、中世から採りいれられていて、古いものは王様の名前、王族や貴族の名前など歴史的人物の名が使われています。次に国家の英雄、将軍の名が使われたり、またその通りの行き着く先の大きな町の名前が使われたりします。したがって、どこの町にもたいてい「ワルシャワ通り」「クラクフ通り」があります。

私が住んでいるアパートは戦前は農地だった所に建った団地で、「マハトマ・ガンジー通り」と言います。近くにはやはりインドの大詩人タゴールの名を冠する通りがあります。

ポーランドの歴史的人物、例えばショパン、キュリー夫人、コペルニクスはもちろん、ナポレオン、シェークスピア、モリエール、ピカソ、コロンブス、ウイルソン、パスツールなどの名前も見られます。

（おかざき・つねお、ワルシャワ大学上級講師）

目　次

《第 82 回例会》コルチャック先生:講演と映画の集い／〈パネル展示〉 …… 1
創立 30 周年祝賀会（村田譲） …… 2
波蘭見聞録（大塚広介） …… 3
ポーランド＆ニッポン歳時記（津田モニカ、ピョトル・ヴジェチョノ、霜田千代麿） …… 4
第 19 代札幌コンサートホール専属オルガニスト マルタン・グレゴリウスさんに聞く（徳田貴子） …… 4
「樺太酋長バフンケ」の髑髏、遺族への返還なるか（井上紘一） …… 6
NHK《ラジオ深夜便》より ポーランドの住所表記（岡崎恒夫） …… 7
第 31 回定例総会議案・2017 収支決算書・2018 会計予算書 …… 〈付録 1〉1
《新刊紹介》ブロニスワフ・ピウスツキのサハリン民族誌（井上紘一訳編・解説） …… 〈付録 2〉1
詩『盲いたシンキンチョウの絶唱』について（井上紘一） …… 〈付録 2〉2

今後の予定

○さっぽろ雪まつり第 45 回国際雪像コンクールに昨年と同じチーム Snow Art Poland が参加、大通西 11 丁目、2018 年 2 月 4 日（日）～8 日（木）

◎《第 82 回例会》コルチャック先生:講演と映画の集い、札幌エルプラザ 4F 大研修室、2018 年 3 月 24 日（土）13:30～16:50、講演:塚本智宏、映画:『コルチャック先生』1990 アンジェイ・ワイダ監督／〈パネル展示〉コルチャック先生の思想と生涯～子どもをいかに愛するか、札幌エルプラザ 2F 交流広場、3 月 16 日（金）～24 日（土）8:45～22:00（日・祝 20:00）

◎《第 83 回例会》朗読会「午後のポエジア」8、2018 年 5 月下旬

♪《創立30周年記念コンサート》、札幌コンサートホール *Kitara* 小ホール、2018 年 6 月 23 日（土）17:00～

◎《第 84 回例会》ブロニスワフ・ピウスツキ没後百年記念講演会、講師:井上紘一、2018 年 7 月

入会・退会（敬称略）

入会（2017.9～12）小林浩子、松山愛羅、松山莞太
退会（2017.12）進藤崇子、藤野知明

ご寄付（維持会費）ありがとうございます（敬称略）

（2017.9～12）(10)田中郁子，(9)ジョーリ市博物館送別会，(7)安藤厚，霜田英麿，(6)松山敏，(4)霜田千代麿，30 周年祝賀会お茶会，(3)尾形芳秀，(2)安藤むつみ，カジミェシュ・コグト，亀岡延枝，小林暁子，佐藤純一，園部真幸，高橋健一郎，田口綾子，中島洋，松山愛羅，松山莞太，山本伸一，(1)秋田正惠，安藤瞬，石澤麻里，薄井豊美，小笠原正明，佐々木保子，高岡健次郎，徳田貴子，富山信夫，西村範子，畑山修，前田理絵，松永吉史，三浦洋，水田香，溝延学　（1口千円）

新年度（2017.9～2018.8）会費納入のお願い

年会費（一般3千円、学生 1,500 円）、維持会費（任意のご寄付1口千円）の納入は、下記にお願いします。

【郵便振替口座】[記号]02740 5 [番号]19735
【加入者名】　北海道ポーランド文化協会

※ 未納分のある方にのみ、個別の納入お願い文と振替用紙を同封いたします。

POLE
第 93 号 ポーレ編集委員会
熊谷敬子／越野剛／塚本智宏／松山敏／ラファウ・ジェプカ

第 31 回定例総会議案

（議長 佐藤晃一）

第１号議案 2017 年度（2016.9–2017.8）活動報告について（報告 小林暁子）

1.《第 30 回定例総会＆お茶の会》北大クラーク会館 3F 国際文化交流活動室、2016 年 10 月 29 日（土）総会 14:30～、お茶会 15:30～17:00、お茶会では紙芝居「わたしはテイコです」（絵:児玉智江、文:田村和子）が上演された（語り:日本語:熊谷敬子、ポーランド語:ラファウ・ジェプカ）。参加者:総会 17 人、懇親会 日本 19 人、ポーランド 6 人

2. 例会

(1)《第 78 回例会》レクチャーコンサート:ショパンとバロックの精神～スティル・ブリゼの応用を通して、出演者（お話）加藤一郎（ピアノ）久保田友、國谷聖香、坂田朋優、長﨑結美、田口綾子、札幌大谷学園百周年記念館同窓会ホール、2016 年 10 月 2 日（日）13:30～、参加者約 70 人

(2)《第79回例会》アンジェイ・ワイダ監督を偲んで、札幌エルプラザ 4F 大研修室、2016 年 12 月 5 日（月）18:00～22:00、お話:中島洋、ビデオ『地下水道』『灰とダイヤモンド』、参加者約 25 人

(3)《第 80 回例会》朗読とお茶の会「午後のポエジア」7、ドラマシアターども（江別市）、2017 年 5 月 27 日（土）14:00～17:00【第 1 部】ブロニスワフ・ピウスツキ没後 100 年記念〈詩劇〉ピウスツキ Bronisław Piotr Piłsudski～ポーランド・サハリン 愛と死、原作:尾形芳秀[朗読]、舞台監督:霜田千代麿[朗読/墨象]、演出:斉藤征義、演奏（合唱）ミハウ・マズル、シルビア・オレヤージュ[朗読]、ラドスワフ・ストジャウカ（ピアノ）坂田朋優（サキソフォン/朗読）松山敏（ムックリ）川上恵、結城志穂（トンコリ）橋本隆行、福本昌二、朗読:園部真幸、小林暁子、熊谷敬子、大島龍、菅原みえ子、盲いたシンキンチョウの絶唱:長屋のり子【第 2 部】交流会、参加者約 80 人

(4)《第 81 回例会》ポーランド映画ビデオ鑑賞会 2017～イェジー・カヴァレロヴィチ監督の世界、札幌エルプラザ 4F 大研修室、2017 年 7 月 17 日（月・祝）13:00～17:00『夜行列車』1959、『尼僧ヨアンナ』1961、作品について意見交換、参加者約 25 人

3. 会誌「ポーレ」第 89 号（2016.9.1）、第 90 号（2017.1.25）、第 91 号（4.25）発行

4. 運営委員会: 2017 年度
(1)2016.10.17、(2)11.21、(3)2017.2.27、(4)4.17、(5)7.24

5. 後援／共催等事業

(1)〈後援〉遠藤郁子ピアノリサイタル:ショパン序・破・急・幻～亡夫 田中克己を偲んで、六花亭札幌本店 6F ふきのとうホール、2016 年 9 月 15 日（木）19:00～

(2)〈協賛〉李政美（イ・ジョンミ）コンサート～歴史的建造館に降る祈りの声、曲目:祈り（詩:山尾三省）、アリラン、今日は帰れない（ポーランドパルチザンの歌）ほか、札幌 豊平館 2016 年 9 月 21 日（水）19:30～;小樽文学館 9 月 22 日（木）19:00～

(3)〈共催〉第68回さっぽろ雪まつり第44回国際雪像コンクール（2017.2.5～9、大通西 11 丁目国際広場）にシロンスク県ザブジェ市とグリヴィツェ市からカトヴィツェ美術大学 ASP Katowice コツランガ教授をリーダーとするチーム Snow Art Poland が参加、その作品「重圧 Pressure」は第4位に輝いた。主催:駐日ポーランド大使館

(4)〈後援〉NPO 法人まずるか北海道第6回東日本大震災被災者支援コンサート:私たちは忘れない!～「音の絵」ピアノと朗読で綴る名画の世界、脚本:酒井邦子、ピアノ:遠藤郁子、朗読:高梨幸恵、光塩学園 koen 天秘ホール、2017 年 3 月 11 日（土）14:46～

(5)〈後援〉ポーランド映画祭 2017 in 札幌～追悼アンジェイ・ワイダ監督、札幌プラザ2・5、2017年3月18日（土）13:00～17:30 映画解説トーク:久山宏一&『灰とダイヤモンド』1958、スコリモフスキ / ワイダ両監督インタビュー映像&『夜の終りに』1960、主催:ポーランド広報文化センター

(6)〈後援〉北大祭 2017 ポーランド料理テント“Polski Namiot”、北大総合博物館前、2017年6月2日（金）～4日（日）、主催:北海道大学ポーランド人留学生会、協賛:ポーランド広報文化センター

6.（参考）2017 年度の会員の動向:入会 10 人、退会 9 人、会員数:89 人（2017.9.1 現在）

第 2 号議案 2017 年度収支決算報告について（別紙のとおり、報告 佐々木保子・野村信史）

第3号議案 2018年度（2017.9–2018.8）活動計画について（提案 小林暁子）

1.《第 31 回定例総会&創立 30 周年祝賀会》、ニューオオタニイン札幌、2017 年 10 月 21 日（土）11:00～総会、12:00～14:00 祝賀会

2. 例会

(1)《第 82 回例会》ポーランド映画の集い 2018:『コルチャック先生』1990 アンジェイ・ワイダ監督&お話:塚本智宏、2018 年 3 月上旬

(2)《第 83 回例会》朗読会「午後のポエジア」8、2018 年 5 月下旬

(3)《第 84 回例会》創立 30 周年記念コンサート、札幌コンサートホール Kitara 小ホール、2018 年 6 月 23 日（土）18:00～（予定）、出演予定（お話）三浦洋（ピアノ）國谷聖香、田口綾子、坂田朋優、水田香、西村範子、川染雅嗣、徳田貴子、川本彰子、安藤むつみ、高島真知子&名取百合子、本田真紀子&横路朋子（声楽）松井亜樹（伴奏:高橋健一郎）、高橋可奈子

(4)《例会》ブロニスワフ・ピウスツキ没後 100 年記念連続講演会:井上紘一、新井藤子

(5)ポーランド旅行、2018 年 10 月

3. 会誌「ポーレ」第 92 号（2017.9.1）、第 93 号（2018.1）、第 94 号（2018.5）

4. オンライン広報の強化（Facebook, Twitter）

第4号議案 2018年度予算（案）について（別紙のとおり、提案 佐々木保子）

第５号議案 2018年度役員等案について（提案 小林暁子）

（会則第６条に基づく役員） 新任

会　長：安藤厚

副会長：小笠原正明、霜田千代麿

運営委員：新井藤子、安藤むつみ、薄井豊美、熊谷敬子、越野剛、佐々木保子、霜田英麿、園部真幸、高橋健一郎、塚本智宏、富山信夫、中島洋、松井亜樹、松山敏、アグニェシュカ・ポヒワ、ラファウ・ジェプカ

事務局長：小林暁子

監査委員：斎田道子、野村信史

（会則第 15 条に基づく事務局、会誌編集委員会および部会）

事務局：（事務局長）小林暁子、（会計）佐々木保子、（副事務局長・広報）越野剛、（渉外）ラファウ・ジェプカ

会誌編集委員会：熊谷敬子、越野剛、塚本智宏、松山敏、ラファウ・ジェプカ

（会則第 16 条に基づく東京事務所）

東京事務所：（所長）霜田英麿、（副所長）熊倉ハリーナ

※会員 22 名が出席し全議案が承認されました。

（別紙）

2017年度 収支決算書（自2016年9月1日～至2017年8月31日）

【収入の部】	予　算	決　算	備　考
会費	240,000	238,000	全額（3千円×92人）の86%
寄付金	30,000	47,000	
雑収入	50	2	貯金利子
小　計	270,050	285,002	
前期繰越金	321,791	321,791	ゆうちょ210,105円＋現金111,686円
合　計	591,841	606,793	
【支出の部】			
事業費	150,000	90,197	78例会<講演と演奏>4.8万、30総会1.4万、79例会<映画ワイダ> 1.1万、80例会<ポエジア>1千、81例会<映画>1.6万
連絡費	40,000	71,206	ポーレ発送・はがき・切手他
編集費	40,000	32,464	ポーレ印刷費（89,90号）、用紙、トナーカートリッジ
会合費	25,000	22,137	運営委員会5回、例会・総会打合せ2回
事務費	25,000	10,090	文具・コピー代
雑費	5,000	4,622	ホームページサーバー、ドメイン
予備費	306,841	0	
小　計	591,841	230,716	
次期繰越金	0	376,077	ゆうちょ376,077円
合　計	591,841	606,793	
演奏部会基金	【収入の部】	【支出の部】	備　考
前期繰越金	34,697	0	
利息（北洋銀行）	0	0	
合　計	34,697	0	次年度へ繰越

特別会計			
1. 雪像チーム			
雪像チーム助成金	100,000	100,000	ポーランド大使館より(交通費・食費補助)
2. ポエジア7			
ポエジア7経費		50,968	飲食費、コピー、郵送、紙皿・紙コップ等
一般会計より	968		調整額
ポエジア7助成金	50,000		ポーランド広報文化センターより
3. 北大祭テント			
北大祭テント経費		80,000	レンタル費用、テント登録費
北大祭テント助成金	110,000		ポーランド広報文化センターより
2月交通費		30,000	井上・尾形分

会計の監査にあたり、関係書類及び通帳を照合した結果、適正に処理されていることを確認しましたのでここに報告します。

2017 年 10 月 6 日　監査委員　斎田道子　印
2017 年 10 月 11 日　監査委員　野村信史　印

2018年度 会計予算書(自2017年9月1日～至2018年8月31日)　(単:円)

【収入の部】	前年度決算	予 算	備 考
会 費	238,000	240,000	3千円×80人
寄付金	47,000	60,000	2017.9-10実績程度
雑収入	2	30,010	貯金利子等+演奏部会基金より繰入3万
小 計	285,002	330,010	
前年度繰越金	321,791	376,077	2017.9実績
合 計	606,793	706,087	
【支出の部】			
事業費	90,197	230,000	30周年祝賀会10万、ポエジア8/30周年記念演奏会各5万、その他3万
連絡費	71,206	70,000	ポーレ発送等(2万×3号)、その他広報DM1万
編集費	32,464	45,000	ポーレ印刷費等(1.5万×3号)
会合費	22,137	25,000	運営委員会他(5回)
事務費	10,090	20,000	用紙、トナー、文具、コピー他(前年度実績程度)
雑費	4,622	5,000	ホームページサーバー、ドメイン(前年度実績程度)
予備費	0	311,087	
小 計	230,716	706,087	
次年度繰越金	376,077	0	
合 計	606,793	706,087	

《新刊紹介》

東北アジア研究センター叢書第 63 号
（東北大学東北アジア研究センター, 2018.1）

ブロニスワフ・ピウスツキのサハリン民族誌

～二十世紀初め前後のエンチウ、ニヴフ、ウイルタ～

高倉浩樹監修／井上紘一訳編・解説

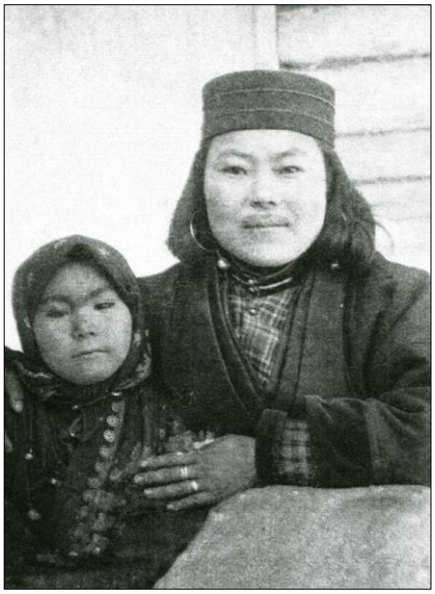
目次

序（井上紘一）…… ix
復命報告
（報告 1）一九〇二～一九〇三年の樺太アイヌへの旅の予報 …… 9
（報告 2）B・O・ピルスツキーに関する情報 …… 20
（報告 3）樺太島へ出張した B・O・ピルスツキーの「委員会」書記宛書簡 …… 22
（報告 4）中央・東アジア研究「ロシア委員会」議長 V・V・ラドロフ氏宛書簡 …… 29
（報告 5）一九〇三～一九〇五年に樺太島のアイヌとオロッコの許へ出張した B・O・ピルスツキーの報告‥35
論文
樺太ギリヤークの困窮と欲求（一八九八年四月二十日擱筆、同年公刊）…… 75
アイヌの生活整備と統治に関する規程草稿（一九〇五年三月擱筆、二〇〇〇年公刊）…… 125
樺太アイヌの経済生活の概況（一九〇五年三月擱筆、一九〇七年公刊）…… 169
樺太島の個別アイヌ村落に関する若干の情報（一九〇五年五月以前擱筆、一九〇七年公刊）…… 205
樺太に於ける先住民（原著は一九〇九年公刊、鳥居龍藏譯の邦語稿は一九一一年上梓）…… 259
樺太アイヌのシャーマニズム（原著は一九〇九年公刊、和田完訳の邦語稿は一九六一年上梓）…… 283
樺太島の原住民における分娩・妊娠・流産・双子・畸形・不妊・多産（一九一〇年公刊）…… 313
アイヌ（一九一一年公刊）…… 355
ギリヤークとアイヌにおけるハンセン病（一九一三年公刊）…… 367
樺太島のオロッコへの一九〇四年の旅より（一九一三年十一月末擱筆、一九八九年公刊）…… 391
樺太アイヌの熊祭りにて（一九一五年公刊、初稿は一九〇七年二月以前に擱筆）…… 483
参考論文・記事
アイヌ（M・M・ドブロトヴォルスキー著）…… 647
小田寒での熊送り（石田収藏著）…… 671
樺太島におけるチュフサンマとその家族（井上紘一著）…… 681
毛深い人たちの間で（W・シェロシェフスキ著）…… 737
日本の新聞が報じたピウスツキ関係記事（井上紘一編著）…… 813
ブロニスワフ・ピウスツキ年譜（井上紘一作成）…… 865
跋（高倉浩樹）…… 893

ピウスツキの妻チュフサンマの写真（本書より）

(1) 53 才のチュフサンマ（北里闌撮影）
1931 年 8 月 15-16 日、白濱にて［北里 1932］

(2) 1934 年 1 月のチュフサンマ［Janta-Połczyński 1936］



(3) チュフサンマと少女（1902-1905 年、ピウスツキ撮影）

(4) 助造を抱くチュフサンマとその親族
（1904-1905 年、ピウスツキ撮影）

（本書は非売品ですが、国内外の主要な大学図書館に寄贈されます）

詩『盲いたシンキンチョウの絶唱』について

長屋のり子さんの詩（POLE 92-2, 2017.9）について、詩人は己の想像力を自由に羽ばたかせ一切の束縛を度外視して真情の吐露（言語化）に生命を賭すことを大前提としつつ、ブロニスワフ・ピウスツキの一研究者として、細かなことで誠に恐縮ですが、以下のように補足させていただきます。（井上紘一、2017.9.15）

1）詩では Bronisław Piotr Piłsudski（BP と略記）へ「ピオトル」と呼掛けておられ、これには詩想の必然性があるものと思われます。ただ BP はポーランドやリトワニアでは「ブロニスワフ/ブロニシ Bronisław/Broniś 」と呼ばれていて、父親の名を踏襲する second name（ピョトル Piotr）で呼掛けられることはありませんでした。サハリンでも同じで、チュフサンマが彼をそのように呼ぶことはなかったでしょう。

2）彼の妻の名前「シンキンチョウ」は、ご子息の木村助造さんによれば間違いで、実際は「ジユウサンマ」と明言されています（上記『…サハリン民族誌』716 ページ）*。村崎恭子さんはこれを /cuh san mah/ と音韻表記し、「太陽から下りてきた女」と解しています。

「シンキンチョウ」は能仲文夫『北蝦夷秘聞』（1933）が初出でヤンタ=ポウチンスキ（1936）も踏襲していますが、それ以前は松川木公（1909）、青山東園（1918）、千徳太郎治（1929）がいずれも「チユサンマ」と、1940 年代前半には知里眞志保も「チュ゜サンマ」と記しています。

3）BP が 1918 年に「ミラボー橋の下で」死亡とありますが、実際は 5 月 17 日「芸術橋 Pont des Arts」の上からセーヌ川へ身を投じ、遺体は 21 日にミラボー橋の袂で発見されました。

4）BP は 1887 年 8 月 3 日、既決囚として樺太島北西海岸のアレクサンドロフスク哨所（亜港）に到着、これが初来樺でした。ただし、監獄当局が 1896 年 7 月、測候所設営のためサハリン南部へ彼を派遣した際の上陸地はコルサコフスクだったと思われます。

5）「5月の夕暮れ」に「美しい湖のほとり」で「あなたにはじめて抱かれた日」は能仲情報によると思われますが、同場面は 1903 年2月頃にアイ・コタンの浜辺で出来と推測されます。「5月」にはブロニスワフは旅行中でした（前掲書 695 ページ）。「美しい湖」は内淵（ナイブチ）の畔にある「白鳥湖 озеро Лебяжье」を指すのでしょうか。

6）長男助造の生年が「1903 年」、長女キヨは（1905 年）「秋」に出生とありますが、実際は長男が「1904 年 2 月 12 日」、長女は「1905 年 12 月 18 日」に誕生と想定されます。

7）詩作上の「トポス」は上述の「美しい湖」、「テンポ」はヤンタ=ポウチンスキから BP の死を初めて聞かされた 1934 年の「今日」（=1月8日）に設定されていますが、夫の死はすでに 1925 年頃「露人の通辯」（=白浦［シララカ］のアダム・ムロチコフスキ）から伝えられていたそうです（金田一京助『北の人』179 ページ、1934）。

たとえ、それが詩魂の生み出した vision, virtual reality だったとしても、チュフサンマへ寄せる夥しい共感の発露にほかならぬ、長屋さんの創造の営為には衷心より敬意を表します。

（注:安藤厚）本稿は詩の作者に宛てて書かれたものですが、両者のご快諾をいただきましたので、上記の新刊紹介と併せてここに掲載します。

* 沢田和彦「ブロニスワフ・ピウスツキ資料を求めて」POLE 92（2017.9）
http://hokkaido-poland.com/POLE/POLE92PilsudskiSawada.pdf